

## 再び「瀬戸内海コドモ連盟」について

堀 田 穰

### 一 はじめに

かつて『瀬戸内海コドモ連盟』について―続観光と児童文化<sup>(1)</sup>―という論文で、大正十二(一九三三)年の『瀬戸内海コドモ連盟』に触れたことがある。しかし、主に大分新聞の記事による探索で、これといっってはっきりとした実態が浮かび上がらなかったため、書いた本人ももどかしい思いをしたのであった。それが、新しい資料を発見したことで、かなりはっきりした実態が分かってきた。今回はそのことを報告したい。

### 二 『瀬戸内海コドモ連盟』について―続観光と児童文化―概略

まず大分新聞大正十一(一九三二)年八月二十四日「大坂お伽倶楽部の歓迎会」という記事を全文収録した。

お伽船の大阪お伽倶楽部の高尾亮雄(たかお・あきお)と、別府お伽倶楽部の梅田凡平(うめだ・ぼんぺい)、さらに原北陽(はら・ほくよう)が「梅田ニコニコ伯父さん」「水引伯父さん」という表記で、現れてくる。さらに巖谷小波の代理としての井田絃声の名前も見える。続いて同年の八月三日「絵のような瀬戸内海を可愛い；白鳩の群」の記事では、大阪の幼稚園児たちが別府に到着し、それに伴って朝倉義、宇崎スミカズがついて来ている。こちらにも梅田、原等のお伽倶楽部メンバーが歓迎に当たったことが報じられる。

続いて梅田の「故梅田凡平召天五十周年記念式」式次第に載せられた年表を引用し、大正十二(一九二三年)十二月十日に「オトギ倶楽部を創立満三周年を祝すため瀬戸内海コドモ連盟を叫び沿岸一府一一県の連盟を結成」という記述に注目した。その年の七月二十二日には「オトギ倶楽部の見学旅行」という大分新聞の記事に別府から大阪へ子どもたちを八月三日に連れて行くという呼びかけを。また八月二十四日「瀬戸内海周遊団一行二十二日午後湯の街へ」では今度は大阪から別府へ子どもたちが訪れた記事がある。

しかし大分新聞では「瀬戸内海コドモ連盟」の記事は見つけられず、十二月十日では「処女航海を終わって紫丸の花婿屋島丸九日朝無事別府入港」に「別府宣伝委員長格のニコニコ小父さん」と梅田が登場していたのだ。それ以後大正十三(一九二四年)八月四日「大阪海上幼稚園別府上陸」、大正十四(一九二五年)七月二十五日「お伽団や学生団続々別府へ」、同年七月二十八日「高松お伽団別府へ」、同夕刊「お伽団が落ちて別府でアンダーセン祭」、同年八月六日「日本で最初のアンダーセン祭」と記事を引用、「瀬戸内海コドモ連盟」についての記述は見あたらないものの、大阪、別府を軸に、高松の蓮井玄英、神戸の塚田喜太郎、岡山の難波金之助、広島森本二泉など、瀬戸内海をめぐるお伽倶楽部ネットワークができて、アンデルセン没後五十年を別府に

集うて、久留島武彦を招いて祭を行った様子から、「瀬戸内海意識」ができつつあったことを明らかにした。傍証として『日本口演童話史』や「童話研究」などの記事も使用し、梅田と共に別府で活躍した原北陽が、その後、森本二泉を頼って広島に移住したことや、「童話研究」の訃報でも梅田が「瀬戸内海コドモ連盟」を組織したという記述があることなどを発見している。ただ結論として

「少なくとも別府、高松、大阪、広島あたりのお伽俱樂部は『瀬戸内海』意識でこの頃から交流をはじめていたのが大分新聞の記事を通してうかがわれる。しかし今の所『瀬戸内海コドモ連盟』の文字は大分新聞の記事の中に発見できていない。組織と言うよりは、これはゆるやかな交流意識の表現だったのかも知れない。<sup>(2)</sup>」

と書く他なかったのは残念であったが、資料が見つからない以上仕方ないことだった。

### 三 児童愛護連盟運動

大阪お伽俱樂部の高尾亮雄は、多面的な人物で、なかなか一筋縄では全貌がつかめない。大阪の初期社会主義研究者も、エスペラント運動史研究者も、果ては宝塚少女歌劇の研究でも、高尾は先駆者として名前が出てくるのだが、他の領域のことが、それぞれの分野からはみ出ているために、その後どうなったかはわからないというような記述ばかりされている。例えば次のように。

「第一次大阪平民社の中心人物の一人であった『大阪日報』記者の高尾楓蔭は、二年のちの第二次大阪平

民社にも多少はかかわるのだが、その後の足どりは杳としてつかめない。<sup>(3)</sup>

この事態は拙論「高尾亮雄とその仕事」<sup>(4)</sup>（一九九一年）、武内善信「高尾楓蔭小論―初期社会主義とお伽芝居」<sup>(5)</sup>（一九九六年）などが書かれて、少しは解消してきている。とはいえ、その多面さは相当なもので相変わらず、こんなことがあったのかと驚かされることがある。

今回の「新発見」も、高尾のお伽船からでなく、志賀志那人（しが・しなど）との関わりからもたらされた。志賀は米騒動を受けて大阪市がはじめた社会事業の実現のために建てられた、大阪市立市民館（後の北市民館）を拠点として都市福祉に活躍し、大阪市社会部長にまでなった人物。

「志賀志那人、その名は福祉にかかわる者のみならず大阪人が、自らの誇りとして忘れてはならない存在である。歴史的に『福祉は西高東低である』といわれてきた。その背景を考えると、近代社会福祉の創設期に志賀志那人のあったことは無関係ではない。<sup>(6)</sup>」

とまで評価された志賀を、支えたのが高尾亮雄らであった。高尾はボランティアとしてこの市民館の活動に加わるが、大きな運動になったのは児童愛護連盟運動であり、その機関誌「子供の世紀」であった。創始者の一人、三田谷啓（さんたや・ひらく）は運動の開始を回想して書き残している。文中彼とは三田谷自身のことである。

「大正十年秋十一月天長の佳節を卜し大阪において児童愛護宣伝なるものを挙行した。この運動の動機を一寸ここで述べておく必要がある。

彼がロンドン滞在中の春、ロンドンの年中行事の一つである花の日なるものを見た。これは道行く人に花を売ったその売上高を社会事業に献げるといふ趣旨であった。

日東の名もなき一青年はこの企てに対し多大の興味をもって目撃して居た。彼の頭には日本でもこれを実行したいという希望がひらめいた。

爾来七年は夢のようにして過ぎたが、ロンドンで深く印象された花の日のことは夢のようではあったが彼の頭の中に残っていた。この夢が大正十年の秋になって実現した。

運動は幸いに成功した。

愛せよ、敬せよ、強く育てよ

との標語を選定したのもこの時であった。

この運動は彼の外に現代議士山榊儀重(やまます・のりしげ)、大阪朝日新聞記者高尾亮雄とが主脳となり他の会の人々が大いに斡旋して、効果を挙げることができたのである。それから漸次同様の企てが興り、ついに東京では中央社会事業協会が骨を折ることになり今日では乳幼児保護週間と称えられて全国的に春陽五月の五日を基点として其の前後におこなわれることになって居るのである。<sup>(1)</sup>

当時、三田谷啓は大阪市社会部、山榊儀重は同教育部におり、また志賀志那人も市民館長になったところであったから、大阪市の社会事業の性格が強かったことが伺われる。その機関誌「コドモ愛護」は大正十二(一九二三)年五月に創刊されたが、志賀の提唱により大正十三(一九二四)年二月から「子供の世紀」と改称し、発行所も大阪市北区天神橋筋六丁目の大阪市立市民館になる。連盟の主事であり、機関誌の発行権編集者である伊藤悳二(いとう・ていじ)も、志賀が東京帝国大学の学生時代に知り合った人物であった。

#### 四 「コドモ愛護」の記事

大阪児童愛護連盟はすぐに日本児童愛護連盟に発展し、機関誌「子供の世紀」は伊藤悌二とともに昭和十九（一九四四）年まで発行されている。しかし初期の「コドモ愛護」は書誌的には「子供の世紀」の一卷に当たるのだが、所蔵している図書館が確認できない。<sup>(8)</sup> 筆者はたまたま、古書店で「コドモ愛護」大正十二年八月号（二巻四号）を入手しており、今回志賀についての論文を書くために精査していたところ、まだ、「子供の世紀」に改称する前の発行権編集人の阪田栞造による記事を見つけたのだった。それは「広島運動に使いして」と題されたコドモ愛護船の三ページに及ぶ報告である。

「七月五日、日本三景の一つで名高い安芸の宮島で、コドモ愛護デーが、厳島町主催のもとに行われた。

霖雨篠々、靄海面を閉じこめた絵の島々を、縫うて行くコドモ愛護船の神々しさは、瀬戸内海の女王厳島明神もさぞや快心の笑みを漏らさずには居られなかつたろう。

大阪児童連盟の一員として、コドモ愛護連盟社の一人としてこの宮島愛護デーに私が特派される幸運に会ったことは確かに私の大きな喜びには違いない。

七月四日、コドモと因縁浅からぬ商船天竜丸に、大阪お伽倶楽部の山田たけし君、京都コドモ党の老先輩山本大幹兄と手荷物を俱にして、先輩高尾亮雄兄の見送りを受けながら天保山棧橋を発し、夕陽四国の壇の浦に沈む瀬戸内海の絶景に魂を奪われながら山陽航路を進む、暁の頃梅雨頻りに襲い、世界の風光

為に一段の彩色が加味され、おのずから詩興に時を過ごすの幸いを得た、午後四時に近き頃、宇品港に到着、天候未だ晴れず、船長事務長は空を仰いで心平かならず、停船暫時、私と宇品において会すべく約束された瀬戸内海連盟の梅田凡平君、大分お伽倶楽部の水引北陽君、さては広島海明会の森本二泉君の姿影だにも見せぬ、不審の眉の益々ひそむ頃、船の出帆汽笛の響く頃『待ってくれーッ!』と棧橋上を転がるが如く駆けつけた男数名の一団、辛くも通い船に飛び乗って本船に辿り着きは正しうこれ私と約束した連中であつた。

コドモを解することには人後に着かぬ船長事務長は、号令一下、雨ザンザと降りしきる中に、船員を督して本船の満船飾を断行した、私共も私共の飾付を敢行した。

船足巖島棧橋に止めた時、爆竹の音は華々しき氣勢を海陸の人々に湧き起こさしめた、と見る棧橋上は人の海、と見る島の通路は小国民の海、旗の海

万歳々々、宮島全町のコドモの歓喜して喜ぶ声の洞、そして打ち振る旗の隧道、宮島全町のオトナの囲む人垣、その中を私共は一路『コドモ愛護講演会場』に充てられた宮島劇場に進んだ、

私はなんとしあわせものであろう、雨の中、びしょ濡れてなお私は嬉しさのこみあげて平和と感謝にひたる事ができたのである、いたいけなコドモ達の、この熱烈な歓迎、そこにはおとなの気分がない、こわばった気持ちが無塵もない、ただ嬉しいという清浄な真心のみの揺動場であつたのだ、

棧橋上に態々出迎えられた町長岸本斐夫氏、巖島郵便局長増原音松氏、三浦巖島学校長をはじめ町の有志と親しく会場において交歓の辞が一行と交わされた、

芝居がかりの大広間に舞台装置が出来上がった時、コドモ達とおとなに依って立錐の余地なき大入満員の座席を一段低く見て、岸本町長は公式に私共一行に歓迎の挨拶を述べられた、この町長の挨拶に対し、広島海明会を代表して広島県社会事業主事安藤寛氏は、コドモ愛護運動の絶対的である所以を論じて答辞に代え、梅田凡平氏は瀬戸内海コドモ連盟の生立ちを述べてコドモ達に挨拶し、私は大阪児童愛護連盟の今日在るの所以とこのコドモ愛護連盟が全国的に延長されなければならぬ事情とを述べて満場の人々に挨拶するの機会を与えられた。<sup>(10)</sup>」

ここまでは、引用してすでに明らかになったが、「瀬戸内海コドモ連盟」とは大阪児童愛護連盟などと同じように、児童愛護運動の団体なのであった。その成り立ちは、

「かくして市内四百猶予の児童に諒解と共鳴を持つ団体に交渉したる処、諸団体は進んで協力一致し實際運動をなす決議をし、喜んで責任の費用を負担、支出することとなり、<sup>(11)</sup>」

と、大阪児童愛護連盟の成り立った時の事情を伊藤悌二<sup>(12)</sup>が書いたのと同じように、「児童に諒解と共鳴を持つ団体」が連盟となったに違いない。そしてさらに具体的にそのような団体の旗手として各地のお伽俱樂部があったのに違いない。

## 五 「コドモ愛護」の記事(続)

それはこの「コドモ愛護」の記事をさらに読んでいくと明らかになる。



「午後六時開会の予定が七時過ぎに狂ったため、定められたプログラムを変更し、私の挨拶の後を受けて、山田たけし君の軽妙なコドモのためのお伽噺、水引君の童謡唱歌、引続いて大阪より持参したるコドモ活動写真を二巻映写して一先ず休憩、コドモのお土産(大阪各商店よりの寄贈品)を配って後、私共はやっと汗を拭うことができた。

午後九時再会、会場は老若男女の聴衆ギッシリ詰っていわゆる会場はすし詰め、あふれ出た人々は舞台裏に座席を占めるという大盛況であった、時間短縮の約束は私共から提起され、岸本町長の開会講演に次いで安藤氏は親の健康とコドモについて、私はコドモ愛護運動の理由と真にコドモを愛する道についての講演を試み更に今や全国的に歓迎されつつある大阪児童愛護連盟編纂『愛のこよみ』の宣伝講演をも高唱し得ることができた。

梅雨どきの蒸し暑い、人いきれのする夜、しかも肩と腕と腕とがくっつけたように寸分の隙間もない、いわば早く逃げ出してお手近の海風に涼を容れたい夜に、アノ熱心なる面持で、私共の声を、アノ静けさで聴き容れて下された宮島町民諸彦の熱と態度とにはあまりに私のすべてが貧弱が大き過ぎて慚汗限りなきをおぼえた。

講演資料の豊富な持ち主である一行の諸君も、時間の都合上止むなく舞台に顔をさらすのみに終わり、期待された活動写真映画に満場の大満足を買い、幕間を利用して梅田氏の別府対宮島のコドモ連合提唱、あるいは即席作歌『宮島名所』の合唱に急霰の拍手を贈られ『愛護宣伝も敵島では徹底した』と衆評一致した午後十一時三十分、歓声場に群り起こって散会した。

雨やんだ島の砂利道の快さ、私は交々の愉快に満腹して、旅館かめ福の大広間に枕を並べた、そして梅田凡平氏の象の如き、山本大幹氏の熊の如き、熊野徳一氏の雷の如き大鼾声に明日の睡眠不足より来る倦怠を予感せずには居られなかった。



夜来の雨晴れて夏の厳島気分あふる、床離れした私共は、宮島名物杓子郵便に興がり、午前九時というに千畳閣に乗り込んだそれは厳島町と広島海明会の共同主催にかかる『お伽大会』が千畳閣で開催のプログラムは既定の事実であったからだ、島の少年少女達は、先生の付添いで続々大堂伽藍の千畳閣に入場する、既に町より設備された会場は、完全を期しただけあって結構至極だった。

海に浮かんだ大朱殿、海に生えた大鳥居、青葉若葉の木の間を通じて漏るる数多の本堂、それは一幅の絵でなければならぬ、特に美術院派大家の彩管になった大作と見るに応わしい、鳩の喜ぶ羽ばたきの音、鹿のいきかうその寂然たる雅趣、海風引き幕を揺るがせて蟬の声も静まるこの幽境に、無邪気な二千の子ども達が、あるいは緊張し、あるいは笑い、あるいは夢中に彷徨がように、杓子蜜集の大柱を背にして設えた演壇上より聞こゆる『童語』に『童謡』に視聴を傾けつくしているさまの光景は、神境であり、善美の極であり、純真の人の願う社会の出現である。

海明会森本二泉、別府お伽倶楽部梅田凡平、海明会上月薫、同熊野徳一、大分お伽倶楽部水引北陽、京都お伽倶楽部山本大幹、大阪お伽倶楽部山田たけしの諸君の、舌端よくコドモ達と徹底的に共鳴し終わった時、静寂なるこの神の島の青空に、五つ六つの大風船が、恰度コドモの平和の心を、天の神さまにお知

らせするがように、高々と昇って行った。コドモ達は、紅葉谷に青々と生いている楓のような手を叩いて、無上に喜び勇んだ、そして私共も心ゆくばかりうるおいの気持ちでコドモ達に和してのち『さよなら』をした。



厳島愛護デーに大阪商船会社、中山クラブ化粧品本舗、小林ライオン齒磨大阪支店、乾卯ラクターゲン本舗、粉乳グラキソ販売会社、大阪学校映画協会の諸彦より宮島のコドモのために贈られた厚意をここに感謝して筆をおく。<sup>(12)</sup> (大正一二、七、一五)

別府、大分の梅田凡平、原北陽、広島森本二泉、上月薫、熊野徳一、京都、大阪の山本大幹、山田たけしが、それぞれのお伽俱樂部を名乗って、子どもたちにお伽噺を口演している様子は、これまで新聞で追及してきたお伽船運動と変わりないのだ。ちなみに上月薫、熊野徳一、山本大幹、山田たけしの名前は口演童話の正史というべき『日本口演童話史』<sup>(13)</sup>には見あたらなかった。

しかし「子供の世紀」や連盟創設十五年記念に出された『全日本児童愛護運動写真帖』<sup>(14)</sup>などを見ると、児童愛護連盟運動は健康優良児を選ぶ赤ん坊審査会などで、文部省をはじめとした行政に役割を認められ、国が必要とする優秀な兵士になっていく健康な子どもを育てるという、国民的な運動になって行った分だけ、初期の高尾や梅田らが考えた方向とはかなり離れていってしまう。筆者も改めて志賀志那人の研究に携わらなかったら、この記事の存在には気がつかなかっただろう。つまり主流になる雰囲気は、アルバムに収録されている文部大臣の式辞に代表されるようなものであった。

「第七回全東京乳幼児審査会表彰式辞

子供は家の宝であると同時に国の宝であります、お子さん達を、あなた方の良き後継者として健やかに育て、次の代の良き国民として強く、正しく、育て上げねばならぬ事は今更申上げる迄ありません。

日本児童愛護連盟はかかる見地に立ちまして、今から十五年前より此の大切な子供を愛護すべきことの必要を主唱致しまして、地方の各団体と協同して子供の愛育保護に不断的努力を傾けて来たのであります。

(中略)

昭和十年十月三十日

第七回全東京乳幼児審査会 総裁 文部大臣 松田源治<sup>(15)</sup>

コドモ愛護船がお伽船の発想から考えられたのだから、瀬戸内海コドモ連盟が児童愛護連盟にすぐつながると思えられそうなものだが、その後のイメージが阻害していたようなのだ。

六 時系列順

これまで判明したことを時系列順に並べてみよう。この場合、大正十二年のことであるから、この後お伽船運動に加わる高松お伽倶楽部も視野に入れて、香川新報の記事をあわせてみよう。

大正十二(一九二二)年

一月五日

長男出生 梅田平八。(故梅田凡平のあゆみ)

- 四月十三～五日 大阪での児童愛護宣伝デー。市立市民館前田林学士考案の「愛の暦」乳児の巻が愛護宣伝に効果を奏する。自動車、モーターボートで宣伝をし、実況を映画撮影して地方宣伝の材料を作った。(アルバム)
- 五月 機関誌「コドモ愛護」創刊。(アルバム)
- 七月四日 阪田柗造、天竜川丸で大阪天保山を発つ。宇品で梅田らと落合い宮島でコドモ愛護講演会。(コドモ愛護)
- 七月五日 宮島にて京都、大阪、広島、大分、別府のお伽俱樂部メンバーらのお伽大会。(コドモ愛護)
- 七月十一日 海上大学、師道顕揚会大阪お伽俱樂部共催で八月十日から十四日開催の記事。(香川新報)
- 七月十五日 阪田柗造、宮島の報告記事。(コドモ愛護)
- 七月二十二日 別府お伽俱樂部八月三日に大阪へ見学旅行の記事。(大分新聞)
- 八月一日 「コドモ愛護」八月号発行。(コドモ愛護)
- 八月三日 別府お伽俱樂部、別府発。(大分新聞)
- 八月四日 別府お伽俱樂部、大阪着。(大分新聞)
- 八月五日 別府お伽俱樂部、伊勢神宮参拝。(大分新聞)
- 八月六日 別府お伽俱樂部、鳥羽、二見が浦から大阪へ。(大分新聞)

八月七日 別府お伽俱樂部、宝塚少女

歌劇観劇。(大分新聞)

八月七日 別府お伽俱樂部、神戸港発。

(大分新聞)

八月九日 別府お伽俱樂部、別府帰着。

(大分新聞)

八月十日 夏季海上大学、大阪発。

(香川新報)

八月十一日 夏季海上大学、呉着、宮島

着発。(香川新報)

八月十二日 夏季海上大学、別府着。

(香川新報)

八月十三日 夏季海上大学、別府発。

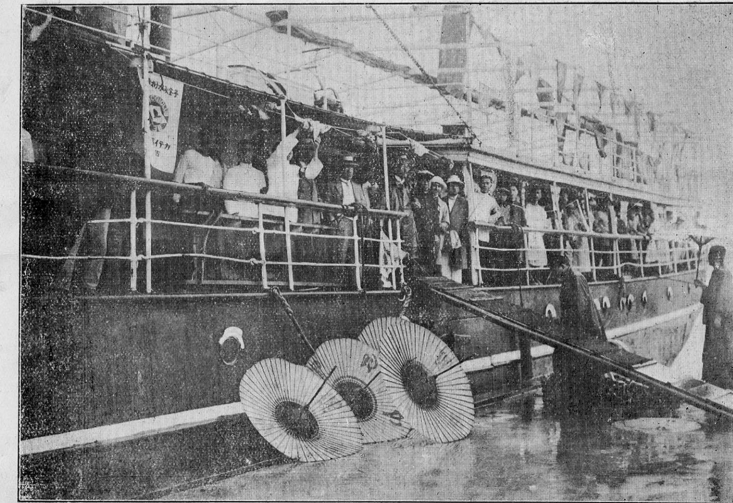
(香川新報)

八月十四日 夏季海上大学、高松着発。

(香川新報)

八月十七日 瀬戸内海観光団、二十五日

港 入 に 島 宮 船 護 愛 モ ド コ



翠巒梅出のために際立つ美の宮島へ、コドモの使徒を乗せたコドモ愛護船が  
麗しく着岸して着きました  
(記事参照)

写真1 「コドモ愛護」大正12年8月号口絵

に来県の記事。(香川新報)

八月十九日 大阪お伽俱樂部瀬戸内海周遊団、大阪発。(大分新聞)

八月二十二日 大阪お伽俱樂部瀬戸内海周遊団、別府着。(大分新聞)

八月二十四日 大阪お伽俱樂部瀬戸内海周遊団、別府へ二十二日来るの記事。(大分新聞)

八月二十五日 大阪お伽俱樂部瀬戸内観光団、高松着。多度津発。(香川新報)

八月二十六日 大阪瀬戸内海見学遊覧団が二十五日高松着の記事。(香川新報)

十二月九日 新造船屋島丸が別府入港。梅田をはじめお伽俱樂部や旅館組合関係者らも歓迎。(大分新聞)

新聞)

十二月十日 屋島丸、九日別府入港の記事。(大分新聞)

同 別府お伽俱樂部創立滿三周年を祝するため瀬戸内海コドモ連盟を呼びかけ沿岸一府一県の連盟を結成。(故梅田凡平のあゆみ)

大正十二年のできごとを時間順に並べてみた。括弧内は出典で、(故梅田凡平のあゆみ)は第二章でも触れた「故梅田凡平召天五十周年記念式」式次第に載せられた年表、(アルバム)は連盟創設十五年記念に出された『全日本児童愛護運動写真帖』、(コドモ愛護)(大分新聞)(香川新報)はそのままである。

ただ、記事中の出来事が実際に起こった日付と、それが報じられた記事の日付を両方記した。起こった事柄と報道の日付の混同が起こりがちであったので、念の為の方法をとった。これによって気がついたのは、前回の論文「『瀬戸内海コドモ連盟』について」で、新造船屋島丸が着いた日を十二月十日と誤解していたことだ。

記事が掲載されたのは十日だが、実際に梅田凡平が別府港で歓迎したのは九日であった。瀬戸内海子ども連盟が結成された当日、十日ではなかったのだ。となると、十二月十日になんらかのイベントが行われたかも知れないという可能性が残っている。

また、この大正十二年という年は、子ども愛護船にはじまって、別府お伽俱樂部が、大阪へ向かい、年齢の高い生徒を対象にした夏季海上大学が瀬戸内海を巡り、大阪お伽俱樂部が別府、高松を訪れる、なんというにぎやかな夏だったのであろうか。

## 七 おわりに

「瀬戸内海子ども連盟」は、お伽俱樂部やお伽船の直接的な延長にはなく、実は重なっているものの、児童愛護連盟運動という別のコンセプトによる運動の一部であることが、「子ども愛護」記事によって理解できた。今後、さらに詳細を調べるには、「子供の世紀」誌の調査が必要になるに違いない。しかし、前述した通り、大正十二年の「子ども愛護」誌時代の所蔵は N A C S I S W e b c a t では探せずに、わずかに三巻(大正十四年二号)が日本近代文学館に、三巻十一号が大阪府立大学学術情報センターに所蔵されているのみである。お伽運動から眺めても、大正十二年あたりからネットワークを形成してきた瀬戸内海各地の運動が、大正十四年には本格化したのであるが、それは児童愛護連盟運動という新たな地平を得て、相互に刺激を受け、拡大していったということになる。



「子供の世紀」全巻全号が発見されることを願うとともに、既存の資料の調査を進めたい。

注

- (1) 京都文化短期大学紀要第二十五号所収、京都文化短期大学学会、一九九六年十二月。
- (2) 『瀬戸内海コドモ連盟』について―統観光と児童文化―、京都文化短期大学紀要第二十五号、四〇頁。
- (3) 『なにわ明治社会運動碑 下』荒木傳著、柘植書房、一九八三年、四二八頁。楓蔭は高尾亮雄の号。
- (4) 『大阪お伽芝居事始め―うかれ胡弓』回想と台本―高尾亮雄著、堀田穰編、関西児童文化史研究会、所収。
- (5) 「ヒストリア」第一五〇号、大阪歴史学会、所収。
- (6) 「はじめに」右田紀久恵『都市福祉のパイオニア 志賀志那人 思想と実践』志賀志那人研究会編、和泉書院、二〇〇六年、所収。
- (7) 『山路越えて』三田谷啓、日曜世界社、一九三一年、引用は復刻版『山路越えて』（伝記叢書十二）三田谷啓、大空社、一九八七年、六〇―六一頁。
- (8) 国立情報学研究所総合目録データベースでも三巻以降、つまり「子供の世紀」誌しか所蔵されていない。
- (9) 『子供の世紀』と児童愛護連盟 堀田『都市福祉のパイオニア 志賀志那人 思想と実践』所収。
- (10) 「コドモ愛護」大正十二年八月号、コドモ愛護社、五一―五二頁。旧漢字、仮名遣いは読みやすくするために現代風に改めている。引用については以後も同じ方針である。
- (11) 伊藤「大阪児童愛護連盟の起源及び其の発達」『連盟創設満十五年記念全日本児童愛護運動写真帖』日本児童愛護連盟、一九三六年。アルバム仕立てのためか、頁番号が打っていない。
- (12) 「コドモ愛護」大正十二年八月号、五一―五三頁。
- (13) 内山憲尚編、文化書房博文社、一九七二年。
- (14) 注(11)と同じ『連盟創設満十五年記念全日本児童愛護運動写真帖』日本児童愛護連盟、一九三六年。編集権発行人

「は伊藤悌二。発行所は日本児童愛護連盟と大阪児童愛護連盟が並記され大阪市北区天神橋筋六丁目大阪市立北市民館内である。

(15) 注(11)に述べたように頁番号がないのであるが、伊藤悌二の序文を一頁とすると三頁に当たるとする。